

四

か月後、同じカブで北海道に行った。その間、ぼくは高校生から大学生となった。赤地に白で一とある標識が何を意味するか、原付バイクで走ってはならない道路がある、などということもだんだんわかかってきて、よくこんなので免許が取れたものだとかあきれたり、奈良の道路で追い越していくのドライバードもぼくの顔をのぞき込んでいた理由に合点がいつたりした。北海道は、奈良に比べれば何倍も遠いのだが、それはまったく苦にならなかった。寒くないというだけで、どこまでも行けそうな気がしていた。

一月かけて旅をする間、ツーリングをしている若者たちとは、あちこちで出会い、よくしゃべった。カブに乗っている者には一人も出会わなかった。逆に珍しがられて、向こうから話しかけられることが多かった。いきなり打ち解けた雰囲気になるのは、カブのおかげだった。スピードを放棄した鈍重な風体が警戒心を解くのだろう。馬力や装備を披瀝しあっているライダーたちの話題には入れなかったが、一人旅を楽しんでいる若者たちとは話が弾んだ。

「学生時代は、時間はあるけど金がない。社会人になると金はあるけど時間がないからね。」

この言葉をいつたい何人から聞いたことだろう。そして何人にしゃべったことだろう。あのころ若者はみ

んなそう思っていた。今の若者たちもそう思っているのだろうか。

就職を控えた学生やわずかな休暇をあてて来ている社会人たちは、今のうちにやりたいことをやっておけ、と言った。食堂に入るの一日置きと決め、パンとキャベツとマヨネーズをスーパーで買ってかじりついていたぼくは、金があるってだけで社会人の方がはるかにうらやましかった。

教員になると、やっぱりその通りだった。金はあるけど（金持ちという意味ではない、念のため）時間がなくなつた。気ままな一人旅に時々焦がれはしたが、そこまでだった。頭の中から仕事を追い出すことができなのに、効率を無視した旅などできょうはきょうもなかつた。

定年退職した今、金はあるけど（金持ちという意味ではない）時間もある。これがどれだけ希有なことなのかまだ十分に理解できていない気がする。気ままな旅をせすにおくものか。

カブで走った道を地図でたどりながら、一回目の希有な旅を振り返る。ここは大地に夕日が沈むのを眺めながら走ったところだ。暮れるまでに町にたどり着くのかわからぬまま。ふと、思い至る。気ままと心細さは裏表だ。気ままだけなんて、あるはずない。



專業ババ奮闘記 (その2) 60

木幡智恵美

虫捕り (7)

六月に入った。義母をデイサービスに送つてから向かった畑に、雨が降った形跡は全くない。畑のある一帯、実家周辺は雨が乏しい。神戸川を渡り、長浜神社の辺りから日本海に出るまでは砂地で、鳥取砂丘を狭くしたところに家が建ち、畑が点在するという感じのところだ。気候も砂漠さながらで、雨の中を松江から出雲に向かうと、神戸川に架かる橋を境にピタッと雨は止み、陽まで射してくるという具合だ。

松江の家のベランダで育てているアジウリやスイカの苗が成長し、大きくなった物から移植して、この日は第二弾。畑の西端に建てた物置の下に三つ、反対の東側に二つ、水溜を置いている。物置の屋根を伝って雨が落ちるようにして水を溜めているのだが、もう三分の一くらいになつていた。この水が枯れると、四リットルペットボトルに水を汲んで運ぶことになる。四〜五十本ものペットボトルに水を入れ、畑の所々に置いておく。去年は一日おきに早朝スーパーカブを飛ばして水やりに通つた。途中でチェーンが切れ、ジャフを呼ぶ羽目にもなつてしまった。今年はそうならないようお願いしたので、ニ

寛大と実歩に羽化するところを見せたくて、キアゲハの幼虫をあげていたので、ニンジン葉っぱを摘む。娘にあげたパセリはすっかり葉が無くなり、我が家のパセリも葉が乏しくなつてきたのだ。キアゲハは、パセリに似たニンジン葉も大喜びで食べる。作業を終え、着替えに実家に戻る。帰り際、庭のキウイの実を確認し、イチジクに目をやると、キマダラカミキリが二匹くっついていて、寛大と実歩に持つて行ってやろうと袋に入れる。

帰りに娘の家に寄ると、玄関から出てきた寛大と実歩が、「Mが来ちようよ」二人同時に言う。娘の中学時代からの友だちだ。たまに子守がてら遊びに来てくれている。キマダラカミキリの袋を二人に渡して家の中に入ると、Mが「お久しぶりです」と笑顔を向け、宗矢がキヤツキヤと声を立てた。宗矢はすっかり私を受け入れてくれている。「キアゲハに」と娘にニンジン葉を渡すと、「幼虫、動かんに」と言うので、家の裏に回る。パセリの葉の上の幼虫は、三匹とも黒いまま干からびていた。こんな最期になるとは。そつと手を合わせた。

30代フリーター やあ、ジイさん。トランプが先日、大統領退任後初の大規模集会を開いたと報じられていた。現職を退いたあとも根強い支持がある。年金生活者 固い支持層の存在は、おのれの知識、知力ゆえに民衆を見下し、その生活を軽んじてきた民主党のエリート、エスタブリッシュメントに対抗する力であり続けるだろう。

トランプは大統領就任演説で「私たちは、首都ワシントンから権力を移し、国民の皆さんに戻すのです」と語り、ワシントンのエスタブリッシュメントから不遇な扱いを受けていると感じる国民の味方として熱い称賛を浴びた。

そのときの選挙についてフランスの歴史人口学者エマニュエル・トッドは次のように指摘している。「ニューヨーク、ワシントン、ロサンゼルス、サンフランシスコなど大都市のメディアや大学のエリートは、トランプ支持者を『学歴がない』『教養がない』と馬鹿にし、ヒラリー本人も、『嘆かわ

しい人々 (deplorable)』とまで言いました」(「それでも私はトランプ再選を望む」、『文藝春秋』2020年11月号)。そうした上から目線のエリートたちが民主党の主導権を握ったことがトランプを大統領に押し上げる要因のひとつになった。

30代 なぜそんなエリートが生まれたんだ。
年金 背景に社会の情報化がある。情報とは知のひとつだから、情報化社会とは知あるいは知力がものを言う社会といつてもいい。同時に第2次産業に代わって第3次産業が経済の牽引車となった社会でもある。第3次産業は第2次産業以上に知識、知力が求められる、それを所有する者が優位を占める。

他方、産業の本流から外れた第2次産業は以前ほど雇用を生まなくなり、鉄鋼や石炭などの産業に従事していた労働者たちは働き場を失っていった。トランプは彼らを「忘れられた人たち」と呼び、いま不遇な目に遭っているのはワシント

ンのエスタブリッシュメントのせいだと訴えて支持を広げた。

この政治的な構図は今も変わっていない。もし彼が次期大統領選に立候補すれば、当選はしないまでも、いい勝負をするだろう。知識、情報、知力を手にした者が有利になり、その格差が広がる社会では、リベラル派がどんなに嫌がっても、トランプ的なものが消えることはない。

夏目漱石は『草枕』の冒頭に「智に働けば角が立つ」と書いた。トランプ的なものは、智に働き過ぎて民衆の生活を軽視する傾向に陥りがちな民主党やその支持勢力に活を入れ、軌道修正する役割を果たすだろう。

30代 だからトランプやその支持者のガラの悪さにも耐えろと？

年金 思想の課題は知識の蓄積にではなく、「大衆の原像」を自らに繰り込むことにある、と吉本隆明は繰り返し語った。このことは思想ばかりでなく、政治にも当てはまることをトランプの登場は示した。

大衆の原像とは、天下国家のこととか、芸術のこととか、日常生活から遠いところにあることについてはふだん考えず、自らや自らに近い人たちの生活のことを第一に考えて暮らす人間の像を指す。現実にはそういう人物は存在せず、みな大なり小なりそこから逸脱して生涯を送る。だから原像としての大衆はひとつの理念型と言っている。

大衆の原像を自らに繰り込む作業は、もしその理念型の人物が実際に行動するとしたら、どう考え、どのような振る舞うかを想定する作業、その人物が自らの当面する問題をどう受け止め、何を考え、どう対処しようとするかを想定する作業となる。

30代 トランプがそれをやったと言うのか。

年金 生活を第一に考える原像としての大衆が、もし失業したラストベルトの労働者だったら、その苦境に目を向けないで、ジェンダーフリーや脱炭素にその知識や知力を費やすワシントン

ニュース日記 792
中村 礼治

トランプ的なものは消えない

策においても言える。

北朝鮮の非核化を、同国に影響力のある中国の力を借りてやろうとしたオバマ政権までの路線をトランプは捨て、金正恩とのじか取引によって進めようとした。その結果、朝鮮戦争の事実上の終結を確認し、北朝鮮に核実験と長距離弾道ミサイルの発射を停止させた。

目標に掲げた「完全な非核化」にはほど遠いが、東アジアの緊張を緩和し、アメリカは朝鮮半島情勢を以前ほど気にすることなく、中国と対抗することができるようになった。

バイデンはトランプの対北朝鮮政策を土台にしながら、「即時完全非核化」から「段階的アプローチ」に手順を修正して進める方針とされている。それは両国による事実上の核の共同管理が続くことを意味する。もしバイデンがトランプではなく、オバマから政権を引き継いでいたら、それはあり得ず、いまも朝鮮半島は核をめぐる不安定な状態が続いていただろう。